

すららら

bowmoq

# 1.

「ラボルト先生」

添嶋駿がそういった時、窓から九月の涼しい風が入ってきた。

放課後の美術教官室。二人は部屋の中央に置かれたテーブルを挟んで向かい合うソファに腰かけていた。ラボルト先生とよばれたその人物はソファの上で体をひねっている。駿の方からは顔が見えないから確かなことは言えないが、窓の外をながめているらしい。どうやらまた別の次元にとんでしまっているみたいだ。

「ラボルト先生」

もう一度よぶと、ようやくラボルト先生は駿の方へ体を向き直した。

「添嶋くん、どうかした？」

「どうしたじゃないですよ。外になにか気になることでもあるんですか？」

「いや特に気になることはないんだけどね。ずいぶん日が短くなってきたね」

確かに外は暗くなり始めている。9月ももうすぐ終わりなのだから当たり前といえば当たり前なのだけれど。

「そうですね」

あきれた。勝負の合間にそんなことを考えていたのかと思うと、自分が無視されたようで少し腹が立った。自然と駿の声は刺々しいものになってしまった。

「次、先生の手番です」

二人に挟まれたテーブルの上にあるのは将棋盤。

駿とラボルト先生は放課後よく将棋を指す。今日の勝負は駿の先手、勝負は序盤から中盤に差し掛かかろうとしているところだ。

「そうか、そうか。うん。どうしようかな」

先生はなぜ自分が声をかけられたのか、ようやく理解したようで、すぐにやる気を取り戻したようだ。

腕を組んでテーブルに乗り出し、盤上の様子を真剣に見つめ始める。

その姿勢に駿は一瞬ドキッとして目をそらし横を向いた。ちらりと横目でうかがうと、先生は将棋盤をじっと見つめたままひとりごとを言いはじめていた。ひとりごとが何を言っているのかは聞き取れなかった。

先生と将棋を指すときはいつもこうだ。お互い膝を向かいあわせて真剣に、とはいかない。勝負のことを忘れてどこか別の次元にいつてしまったり、かと思えば今度は急にだまり出して考え込んだり。いちど集中状態に入るとあとは待つしかない。声をかけても無駄だ。最初の頃はとまどった。年上のはずなのにまるで子供を相手しているような気になってしまう。だけど駿は今ではこの状況にずいぶん慣れた。

横目で見ると、まだひとりごとをぶつぶつと言っていた。どうやらちゃんと考えてくれているらしい。別の次元にいつてしまわなくてよかった。駿はそう思った。

駿はそのまま横を向いて待つことにした。真剣に考える先生にずっと注目しているのはなんだか悪いような気がする。

窓の外からは運動部の元気な声がしている。部活に勤しむたくさんの学生たちの様子が自然と目に浮かんでくる。

五分ほどたったころ、

「添嶋くん」

と今度は駿の方がよばれた。

視線をラボルト先生にもどすと、先生は駿をじっと見つめていた。ラボルト先生の瞳は色素が薄く、彫りの深さもあいまって、その視線は人をひきつけるものがある。

「次の手はきまりましたか」

駿はこの瞳が苦手だった。逃げるように視線を将棋盤にもどす。見つめられるとまるで心を見透かされているように感じて居心地が悪い。心を落ち着けるように駿は直前の盤面を思い出す。序盤をすぎ双方の狙いがあらわれてきてこれから急速に勝負が動き始める。そんな状況。さっき指した駿の手はこれから攻めこむ意思を見せた一手だった。

はたして先生はそれにどう対応してくるのか。守りを固めるのか、それとも攻めには攻めで迎え撃つのか。先生の指し手を確認する。先生の行動は守るのでもなく、攻めるのでもなかった。それはまったく想定していなかったものだった。

信じられなかった駿は目の前の盤面と自分の頭のなかの棋譜をなんども比べなおした。ひょっとしたら自分の考え違いかも。しかし、何度も比べてみてもそれは間違っていなかった。

「先生、指しました？」

「いや、指してないよ」

先生はどのような手も指しなかった。盤面はさっき駿が指した状態からなにも変わっていなかった。

考えに考えてなにもしなかった。それが何を意味しているのか。集中しているように見えたけれど、実は何も考えていなかったのだろうか。

真面目にしてくださいと非難しようとしたら、一足早く先生は

「投了します」

と負けを認めた。

「…投了、ですか？」

「投了」

「つまりは負けを認めると」

「添嶋くんつよいねー」

「ラポルト先生、真面目にやってください」

ふざけた様子にすこし刺のある言い方になってしまう。

「まだまだこれからじゃないですか。そもそも投了って言うのは相手に失礼がないように自分の負けを潔く認めることを言うんですよ」

「うん。だから負けを認めます。参りました」

「まだまだ序盤じゃないですか。負けをみとめたら逆に失礼です」

思わず語気を荒らげてしまった。

先生の目は驚いて丸くなっている。

怒ってしまったしてしまった自分をごまかすように咳払いを一つする。その様子を見てラポルト先生は安心したように笑った。

「ワケを聞かせてください」

「ワケ？」

「投了した理由です」

「難しいな、説明するのは」

ラポルト先生は腕を組み将棋盤を見つめなおすと、すぐに背中をソファにあずけて天井を見上げた。右手は何かを描くように宙を舞っている。

「添嶋くん、割と成績いいよね」

「ええ、まあいいほうです」

「学年で何番ぐらい？」

「…10番以内には入ると思います」

「じゃあ、同級生に質問受けたりするでしょ」

「何の話してるんですか、先生」

「だから、同級生に質問受けたりするでしょって話。添嶋くん数学得意だったよね。だから、例えば2次方程式はどうやってとけばいいの？とか。ちょっと気になってる女の子に質問されてラッキーとか言うことあったりしない？あ、今はあくまでも例えだからね。こんな簡単な質問する人はかなり稀だと思うから」

「友人からとかはしょっちゅうありますよ。気になった女の子からってのはあまり無いですけど…」

「気になった女の子がいるの？」

にやにやした顔でラポルト先生はこちらを見ている。

「結局なにが言いたいんですか？」

実にムカつく顔だ。

「ごめんごめん、話を戻そう。添嶋くん二次方程式はどうやって解けばいいかな」

「先生、二次方程式わからないんですか？」

いつまでも本題にはいかないラポルト先生に対する皮肉のつもりだったが、

「うん、わからないから教えてソエジマクン」

ラポルト先生は意に介さなかったようだ。この人は本当にしょうがない。

「因数分解できそうなら因数分解して、出来なさそうなら解の公式つかう」

できるだけそっけなく答えた。まったく、この質問にいったいどんな意味があるのだろうか。

「そんな感じだね。私もし質問されたとしてもそう答えると思う。ただ、残念なことに美術教師に数学の質問する学生はそうそういないし、もしいたとしても私ではなく数学の先生に質問するように教えるね」

はたして先生の話はちゃんと聞いていないといけないのだろうか。不安になっていると駿のそんな気持ちが顔に出てしまっていたのか、ラポルト先生は慌てて話をもどした。

「二次方程式の場合はそれでいいとしよう。じゃ、次の質問は、ある点を通してx軸と交わらない直線の方程式ってどうやって求めればいいのか？あ、もちろんx-yの二次元平面で」

「ある点を通してx軸と交わらない直線ですか？」

少し考える。そんなに難しい問題ではない。

「x軸と交わらないってことはx軸と平行だから、直線の方程式を $y = b$ の形にして、ある点を代入すればいいはずですよ」

「正解」

「ありがとうございます。ってなんでいまこんな話をしてるんですか」

駿の質問は軽く無視された。

「では今の問題に対する解答についてさらに質問。どうしてx軸と交わらない直線がすなわちx軸と平行な直線ということになるの？と聞かれたらどう答える」

「x軸と交わらないのならx軸と平行であるべきですよ」

「うん。それはそう。だけど質問の答えにはなっていない。質問者はx軸と交わらない直線イコールx軸と平行な直線ということがわからない。だから、平行であるべき、とか言っても理解してくれない。ちゃんと理解させてあげなきゃ。さあ、どうする」

少し考える。だが、答えは簡単には浮かばなかった。

「難しいでしょ」

「難しいです」

「どうして難しいかわかるかい？」

考え込んでなかなか答えをだせないでいる駿を見てラポルト先生はすこし楽しそうだ。

「なぜ難しいか。それは質問が、直感的に理解していることに対しての説明をもとめているからだ。添嶋くんみたいに理解できる人はx軸と交わらないためには直線にほんの少しも傾きがあってはならないすなわち平行でないとならないということがピンと理解できる。だけどわからない人にはなんで平行じゃなきゃいけないんだろう、ほんの、それこそ目ではわからないぐらいのちょっとの傾きなら大丈夫じゃないのか？とか思っちゃうわけだ。こういう人に平行でなければならぬと理解させるのはけっこう骨の折れる作業だ」

いつのまにかラポルト先生はソファを離れ、デスクの方にいた。古ぼけた事務椅子がキィとなった。

「と、こういうわけ」

「なにがこういうわけなんですか」

「投了した理由」

ラポルト先生はテーブルの上の将棋盤を指さした。

そうだった。そもそも序盤も序盤、勝負がまだはじまるうともしていない状況で投了を宣言した理由を聞いていたのだった。それなのにいつの間にか数学の質問の話になっていた。

いまの話のいったい何が投了の理由になるのだろうか。理解ができない駿は、眉間にシワを寄せてラポルト先生を見返した。しかしラポルト先生のほうは、自分の責任は果たしたと言わんばかりに満足した顔をしている。

「いまの話のどこが理由になるんですか」

結局、しびれを切らして駿がそう聞くと、ラポルト先生は意外そうな顔をして言った。

「添嶋くん頭はいいけどカンが悪いほうだね」と言った。

「つまりは、わかっちゃったんだよ自分の負けが」

テーブルのそばまで来て将棋盤を見つめるラボルト先生。目はまっすぐに将棋盤に落とされている。けれども見ているところは将棋盤よりもずっとずっと深いように見えた。

「集中してじっと将棋盤をみつめて考えていたんだよね。かわいい教え子、といっても私は添嶋くんの担任でもなんでもないから添嶋くんにとってはべつに教えられてねーよっていうかもしれないけど、私にとってはかわいい教え子だ。そのかわいい教え子が勝負を挑んできているわけだから真剣に向き合うのは教師の役目」

ソファに座った駿の位置からはラボルト先生の顔は見上げるような格好になる。真剣な顔。とりあえず冗談を言っているわけではなさそうだ。こんどこそはしっかりとした理由が聞けるはず。駿は黙って聞くことにした。

「でね、集中して集中して考えてたら、あ、これは勝てないなってなんとなくわかっちゃったんだよ」

しかし、駿の期待に反してラボルト先生の話はあっさりと終わった。

「それだけですか」

「それだけです」

「そんな理由では納得できません。しっかりと説明してください。勝負はまだ序盤です。これから先どういう手を差していくのかその可能性は無限にあるといっても過言じゃない状況です。はっきり言ってこの状況で勝ちをゆずられても僕には何がなんだかわかりません」

かわいい教え子に、真剣な表情でもっともな非難を浴びせられて、ラボルト先生は少し困ったような顔をした。しかし同時にその顔はなにか悪巧みをする子供のようにも見えた。

「なんとなく負ける気がしたって言っただけじゃ納得してもらえないだろうなとは思った。だから、わざわざ遠回りしてさっきの話をしたんだ」

ラボルト先生はソファに座りなおし姿勢をただした。

「さっきの話でいったように、自分が直感的に理解できてしまっていることを、それが理解できていない人に教えるというのはかなり労力がかかる仕事なんだ。このことについてはさっき添嶋くんも納得していたみたいだから問題ないと思う。そして、今回の勝負で私がこんなにも序盤、ある意味勝負が始まってさえない状況で、なぜ投了してしまったのかという理由も、私にとっては直感的に分かってしまったことなんだ。だから、添嶋くんには申し訳ないのだけれどこれ以上はとても説明できる自信がない」

そう言われてもやはり納得できるものではない。

だが、ラボルト先生の目を見て駿はそれ以上の説明をあきらめた。とても澄んだ美しい瞳だ。ラボルト先生に出会ってもうすぐ半年が経つ。この人は一言でいえば宇宙人だ。不可思議な言動に驚いてしまうことも多々ある。だけど、中途半端に物事をはぐらかしてごまかすような人ではない。それは相手が僕のような生徒であったとしても。

しょうがない。駿はあきらめることにした。もうすぐ日が暮れようとしていた。

ラボルト先生こと岬三好はこの春からこの高校に赴任してきた美術教師だ。

三好の存在は生徒の間で話題になった。新しく赴任してくる先生というのはそれだけでも話題になるものだけれど、それ以上に三好の場合には理由があった。

それは三好の見た目である。世の男性の平均と比べても高いその身長は、中学生の群れの中ではひときわ映える。そしてなによりも目をひくのは顔である。彫りが深く整ったその顔は日本人離れしている。もちろんこの場合の日本人離れているというのは良い意味でのことだ。

四月の始業式、体育館の壇上で新任の先生たちが生徒たちにあいさつをしていく中、三好が番が回ってきたとき生徒たちのあいだから、小さいどよめきが上がった。

三好の注目度は新任の先生の中でも群をぬいていた。始業式の次の日には一部の女子の間ではすでに「ファンクラブ」が発足するほどだった。

添嶋駿は将棋が好きだ。プロの将棋指しを目指しているわけではないが、趣味はなに？と聞かれれば躊躇なく将棋と答えるし、何もすることがないときは鞆に忍ばせている詰み将棋の本を読むぐらい好きだ。

だが残念なことに駿の同級生に彼ほど将棋を愛している生徒はいなかった。放課後たまに興味を示して将棋を指そうと誘ってくれる同級生がいたりするのだが、そういう同級生と常に将棋のことを頭の片隅に置いている駿との力量が

歴然としてしまうのは当たり前のことだった。彼らとの勝負は駿にとっては物足りないものだった。だからといって駿には友達に将棋を教え込んだりするほどの積極性はなかった。むしろ将棋好きな自分に対して気を使わせてしまっているようで申し訳ないと考えるしまうのだった。

しょうがないと半ば諦めた気持ちの駿だったが1年生の終わりごろに声をかけてきた人物がいた。西田先生、三好が赴任してくる前の美術教師だ。

定年間近の西田先生はやわらかな物腰で誰と接するときも敬語で話す。自分の娘に対しても敬語で話すらしいという噂もあった。

特に面識があったわけでもない、いやほとんど面識はなかったと言ってもいい。駿の通う高校では芸術の科目は選択性なのだが駿は書道を選択していたので美術の授業はうけたことがない。

そんな駿にとってはほとんど他人である西田先生が話しかけてきた。

それはある冬の日だった。たまたま廊下ですれ違ったとき、うしろから「添嶋くん」と呼び止められた。駿が振り返ると、先生はなんの前置きもなく話しかけてきた。

「将棋をなさるとお聞きしたのですが」

駿はびっくりした。急な質問だったし、相手が面識のない、それも先生というのもあった。だから駿はその質問に対しては、ただ「ええ、まあ」とついいぶかしんだ返事しかできなかった。

その返事を聞いた先生は少しうれしそうになって、駿に「よかったら放課後一局指しませんか」と誘ってきた。まよったあげく、駿は放課後美術教官室に行った。

部屋にいくと、西田先生はご丁寧にお茶を出してくれた。そして机の引き出しから折りたたみ式の将棋盤を取り出しうれしそうにテーブル広げた。振り駒のときにうれしそうに「最近将棋をする生徒が少なくなってしまうね」と言ったのを駿は今でも覚えている。

その日の勝負は僅差で駿の負けだった。けど負けたことは気にならなかった。それ以上に楽しかった。久しぶりに真剣に将棋を指すことができた気がした。

先生の「また指しましょう」の言葉に甘えて、この日以来、特に用事がないときは、放課後の美術教官室にお邪魔するようになった。

放課後の対局は西田先生が定年で退職される時まで続いた。

2年生の終業式の日には他の生徒が足早に帰る中、美術教官室でお別れの対局をした。西田先生の「最後の勝負です」という言葉に、柄にもなく胸が詰まった。

最後の対局は駿が僅差で勝った。

「今度はうちへいらっしやい。お茶をごちそうします」

対局のあとそう言ったあと、来年赴任する先生のことを教えてくれた。

「私の教え子で、君の先輩にあたる方です。非常に興味深い人物なのでぜひ尋ねてみるといいですよ」

4月になり三年生になった。学校が始まったその日、西田先生の言葉を思い出して三好を尋ねてみようと思い、放課後の美術教官室にいったが中には入らずにそのまま帰ってしまった。そこには三好を一目見ようと沢山の生徒がいた。大方は三好に憧れる女子生徒である。その中にわって入っていくのは気がひけた。

4月の最初のうちは、放課後はいつもそんな様子だった。このころに、誰が言い始めたかわからないが、その彫りの深い端正な顔立ちと美術室にある石膏像をなぞらえて三好は「ラボルト先生」と呼ばれるようになっていた。

そういった状況でなかなか美術教官室に行く気がおきないある日、駿はクラスの子から「添嶋くんってラボルト先生と知り合いなの？」と聞かれた。

その女子は三好のことを気に入っていて放課後よく行っているそう。話を聞くと添嶋駿という生徒はいないか？、もし知り合いならぜひ美術教官室に遊びにくるように伝えてくれと生徒たちに言っているらしい。

ようやく重い腰を上げる気になった駿はその日の放課後、三好に会いに行くことにした。

美術教官室のドアを開けると、そこには楽しげに会話をする数名の女子生徒と三好がいた。

なんと声をかけようか、そんなささいなことを駿が考えていると、三好は駿にきづき、まだ名乗る前に「添嶋駿くんだろう？」と歩み寄ってきた。

駿の顔をまじまじと見つめる。駿は相手のペースにのまれてしまって「どうして名前を知ってるんですか？」と聞く

だけで精一杯だった。

「西田先生に聞いていたからね。君もそうだろう？」

聞き知っているだけでその人とわかるものだろうかといぶかしんでいる駿をよそに、三好は駿の手をとって強い握手をした。

「うん、想像通りだ。君は西田先生のお友達なんだろう。だったら私もお友達だ。これからよろしく」

西田先生が「非常に興味深い人物」と言った意味が少しわかるような気がした。そして駿は「この人苦手だな」と思った。

もうすぐ6時半になろうかというころ、駿が突然の投了に、正確には投了した理由の説明に納得できずに将棋盤を睨んでいるとき、ドアをノックする音がした。

「失礼します」

入ってきたのは柿山香代。ラポルト先生が顧問を務める美術部の二年生。駿にとっては後輩になる。

髪の毛は長く腰ぐらまであるだろう。手足もすらっとしていて、まるでモデルのようだ。そして顔も、駿ごのみの美しい顔をしている。普通にしていれば男性の目を集めてやまないだろう。だが惜しむらくは本人に自覚がないのかその美しさを全く武器にしていない。それが特に現れているのがメガネである。彼女と始めて会ったとき、駿はいわゆるビン底眼鏡というものが今も存在していることを知った。

「添嶋先輩、今日もいらしていたんですね」

その声は他の人が言えば皮肉に聞こえてしまうようなセリフだけれども、彼女が言う場合は全くそのようには聞こえない。香代のあいさつに答えて駿は軽く会釈をした。彼女とはラポルト先生が赴任する前から顔見知りである。

「カヨちゃん。今日はもう終わる？」

「はい。今日はもう帰らせていただきます。戸締まりもしておきました」

香代はそう言って手に持った鍵を先生に渡した。

「ありがとうカヨちゃん。気をつけて帰ってね。また明日」

失礼します、と丁寧に礼をしてから彼女は部屋から出て行った。

「柿山さんってすごく上品ですよ」

「うん、すごく上品。いまどきめずらしい感じの子だよ」

二人は香代の出て行ったドアをしばし見つめた。

「それじゃ添嶋くん。私もそろそろ帰ろうと思う」

そう言ってラポルト先生は着ていた白衣を脱ぎ、荷物を鞆のなかにつめて変える支度を始めた。

なぜ美術教師なのに白衣を着ているのだろう。当然のように浮かんだ疑問を以前本人に聞いてみたことがあるが、その理由は「白衣ってかっこいいじゃない」というどうでもいいものだった。

将棋盤を今一度じっくりと見つめたあと、駒を集めて箱に入れ、将棋盤をたたんだ。鞆に将棋盤を詰めて駿も帰る用意をする。

まだ帰る用意ができていない先生を尻目に一足先に部屋を出ようと、ドアの間隙で「失礼しました」と言おうとしたとき、「添嶋くん」と先生に呼び止められた。

「明日もこられる？」

放課後は、ほぼ毎日遊びに来ているが、約束をすることは珍しい。

「たぶん大丈夫だと思います」

そう答えると、先生はいった。

「ぜひ来てね。渡したいものがあるんだ」

いったいなんだろうかと少し考えてみたが、ラポルト先生の考えていることを当てることのできたためしがないことに気づいて駿は考えるのをやめた。

「失礼しました」

言いそびれたセリフを言いながらドアを閉める時、ラポルト先生は軽く手を振ってまた明日と言った。

よ

帰宅してご飯を食べた後、駿は自分の部屋にこもった。勉強机の上に広げるのは予習、復習のノートではなく将棋盤

。記憶を頼りに今日の先生が投了した局面を将棋盤に再現する。

そしてその後の手を様々に考えた。自分の手と相手の手を交互に指して勝敗が見えるところまで進めていく。それを何パターンも繰り返した。

それは午前二時を過ぎるころまでつづいた。もっといろいろな手を試してみたかったのだけど、明日のことを考えるとここらあたりが限界だ。駿は寝ることにした。

先生が投了した局面からいろいろな手を試してみた。だが、どんな手を試してみても最終的には駿の勝ちになってしまう。

ラポルト先生の言うとおりであった。対局の勝者は駿だった。けど全然嬉しくなかった。

今夜はなかなか眠れそうにない。ベットの中で駿はできるだけ何も考えないようにした。



## 2.

小倉麻由は大きなあくびをした。

こんなにも早く登校するのは初めてだ。

普段は授業が始まるギリギリの時間に登校する。もしくはギリギリ登校できないことも多い。

だが今朝は違う。現在午前6時50分。授業開始まで一時間以上ある。いつも使う電車よりも何本も早い電車でやってきた。早朝の電車とはこんなにも空いているのかとびっくりした。

早朝の学校。まだ生徒の気配はない。教室のドアをそっと開け、中をうかがう。

ひょっとしたらすでに誰がいるかもしれないと少しだけ心配していたが、教室には誰もいなかった。よかった。

ほっとした次の瞬間にはすりと教室に入り、素早くそして丁寧に音を立てないようにドアを閉める。

三年二組。そこは麻由の教室ではない。

昨日の夜何度もシミュレーションしていたとはいえ、いざ本番となるとドキドキする。呼吸を整え、ゆっくりと中を見回す。教室なんてものは基本的に中の作りは変わらない。麻由が普段過ごしている教室とほとんど一緒だ。だけど、いやだからこそ後ろの張り紙とか机の置かれている様子とか少しの違いががすごく気になる。微妙な違和感。まるで異世界に迷いこんでしまったような気分だ。

なぜ麻由はこんなにも早く学校に来たのか。そしてなぜ誰もいない教室しかも自分のではない教室にやってきたのか。

だれもいない三年生の教室に侵入した理由。それは今日18歳の誕生日を迎えるあこがれ先輩、唐沢先輩の机の引き出しにプレゼントを忍ばせること。麻由は鞆を明けて中を見る。プレゼントは端正込めた手作りプリン。生ものをプレゼントするのはどうだろうとも思ったが、先輩の好きなものをプレゼントするのが一番喜ばれるだろうと思いにしないうことにした。そして、それに添えるのは昨日の夜何度も何度も書き直した告白の手紙。

目の前に整然と並ぶ机たち。それを目で数える。窓から二列目、そして後ろから三番目。唐沢先輩の机はすでに確認済みだ。

すばやく先輩の机に向かう。そのまま先輩の椅子にすわる。

誰も来ないうちにミッションを完遂しなければ。

麻由は鞆の中からラブレターとプリンが入った箱を取り出した。

「どうしたの麻由」

ホームルームが始まる5分前、クラスメートのユキは教室に入ってくるなりおはようよりも先に疑問の声をあげた。

麻由がもうすでに登校しているのが珍しいようだ。たまに学校に早く来ただけなのに、この友人は失礼なことを言う。

しかし、しょうがないかなと麻由は思った。いつもより早く起きて眠いのと、プレゼントを渡し終え昨日からの緊張がとけ、今麻由はかなりほうけた顔をしている。

努力の甲斐あって、プレゼントを先輩の机に忍ばせておくことができた。

いざ机の中にプレゼントをいれようとして引き出しの中に手を入れたとき、ちょっと想定外の事態がおこってしまって動揺もしたりしたが、それにもなんとか対処することができた。今のところ作戦は成功したといえるだろう。ついつい満足気な笑みを浮かべてしまう。

それを見てよけいに不審に思ったのかユキはまた聞いてきた。

「ねえどうしたの？なにかいいことでもあった？」

「んふふ、別にー」

今回の作戦は誰にもしゃべっていない。からかわれてしまうのが目に見えていたし、それ以上に、自分の気持は唐沢先輩だけに伝えたいと思っていた。関係のない人間に気持ちを少しでも伝えてしまうと、その純粋な気持ちが薄れてしまう、にごってしまう、そんな気持ちががしていたから。ユキはまだ「ちょっと今日おかしいよ麻由」と首をひねっている。ごめんねユキ、うまくいったら教えてあげる。

始業のチャイムがなるとほぼ同時に担任教師が教室に入ってきて朝のホームルームを始める。麻由の耳には担任から

の連絡事項は全く入ってこなかった。仕事をやり遂げて満足した麻由はホームルームの終わる頃、夢のなかにいた。

「江戸幕府第五代将軍徳川綱吉は…」

麻由は1時間目、2時間目とほとんど寝てしまった。

3時間目は日本史の授業。黒板の前で教師が淡々と江戸時代についてしゃべっている。

ひと眠りして麻由の心はだいぶ落ち着いてきた。そして冷静になってくると、ラブレターを机に忍ばせておくことができたその成功の余韻よりも、果たしてラブレターに気づいてくれただろうかという不安の方が大きくなってくる。

唐沢先輩のひととなりを示すかのように先輩の机の引き出しには何も入っていなかった。毎日きちんと教科書を持ち帰っているのだろう。その几帳面さにおかしくなって麻由はまた先輩のことを好きになった。

何も無い引き出しの真ん中ほどにプレゼントのプリンとラブレターをおいた。きちんと封をしたハート型のシールが手前を向くように。気づいて欲しいがために手前に置くということも考えたが、いざ置いてみるとプリンの方が思ったよりも大きい。先輩以外の生徒の目についてしまいかねない。クラスメイトの方が先輩よりも先に気づいてしまうのは嫌だった。私の気持ちは先輩だけに伝えたい。少なくとも一番最初に先輩に伝えたい。

しかし、少し冷静になれた今となってはもう少し手前に置けばよかったかもしれないと思う。気づいてもらえなかったら元も子もない。

もし先輩がまったく気づかなかったら。私が精一杯の気持ちを込めて書いたラブレターとなんども練習した渾身のプリン、気づいてもらえないことがあるであろうか。ここまでして気持ちを伝えようとしたのに気づいてもらえなかったりしたら、私はなんて不幸なんだろう。

いや、きっと大丈夫だ。唐沢先輩なら気づいてくれる。だって、私が好きになった人なんだから。

麻由の眠気はすっかり覚めてしまった。だめかもしれない。いや大丈夫だ。まるで花びらで占うような麻由の気持ちだった。

そうだ、偵察にいこう。先輩の教室にいった様子を見てこよう。麻由の心は浮き沈みを繰り返したすえに達したひとつの結論だった。朝と違って邪魔な人達が沢山いるから教室に入ったりはできないけれど、廊下からそっと覗こう。ちゃんとはわからないかもしれないけれど、少しは様子がわかるかもしれない。先輩の席を調べるため麻由は同じようなことを何度もやっていた。

麻由は教室の時計を見た。授業時間はようやく半分を折り返したところだ。黒板の前の教師はあいかわらず徳川幕府についてのうのうとしゃべっている。その様子は麻由をいらいらさせた。

「あれ、麻由お弁当は一」

昼休み。いてもたってもいられず教室を飛び出した。遠くでユキの声が聴こえるがとりあえず気にしないことにしよう。そんなことよりも唐沢先輩が気になる。

麻由の高校の生徒のお昼ごはんの選択肢としては、お弁当、学食、購買部の三つが考えられる。麻由は事前のリサーチの結果、唐沢先輩はほとんどのばあいお弁当をクラスの友人たちと食べることを知っていた。そしてお弁当を食べ終わるとそのままのメンバーで校庭でサッカーをはじめめることも。

校庭でサッカーを始めたあとに確認するというのも考えたのだが、それだと遠すぎて細かな表情がわからない。それよりは先輩の教室を横目で見ながら確認する方がよりたくさん情報が得られるはず。

はやる気持ちで階段を上がり三階へ向かう。

先輩の教室は三階の一番奥にある。

教室の前までは普通に、教室にさしかかったら不自然にならない程度に歩調を弱める。そして横目で確認。あやまらないようにさりげなく。先輩の様子を確認してそのまま教室の脇を抜けてそのまま新校舎への渡り廊下へ抜ける。

麻由は頭の中でなんどもリハーサルを繰り返した。

廊下は思った以上に混雑していた。しめた。これならばれないだろう。

ラブレターを見つけて先輩はいったいどんな顔をしたのだろうか。困った顔をしたのだろうか、それとも嬉しくてつい笑ってしまったのだろうか。笑ったのであってほしい。今朝の緊張感もどってきた。

もうすぐ教室にさしかかる。ゆっくりと弱まる歩調とは反対に心臓の鼓動は速くなってきた。すこしずつ進む。とうとう中を覗くことが出来るところまできた。怪しまれないように気をつけて、横目でちらと教室の中を探った。

だが、そこに唐沢先輩は見当たらない。

もう一度こんどはさっきよりも注意してしっかりと見る。だけどやはり唐沢先輩を見つけることができなかった。

そのまま教室を通りすぎて渡り廊下についたとき麻由はすこし首をかしげていた。なぜ先輩はいなかったのだろう。教室の中は昼休み特有のにぎやかさで雑然としていた。ひょっとして見落としてしまったのだろうか。

計画ではこのまま新校舎を通して自分の教室に変える予定だったが、予定は変更。もう一度戻って確認することにした。

きっと見逃してしまったのだろう。不審に思われぬように遠慮してしまったのが良くなかったのかも知れない。

渡り廊下から教室の方へ戻る。横目でちらりではなく今度はいったん足をとめ教室の中をぐるりと見回す。その麻由の様子をいぶかしんで見つめる生徒もいたのだが麻由はそのことに気づきはしなかった。

なんどもなんども、それこそひとりひとりの顔を見つめていった。だが結局、麻由は唐沢先輩の姿を見つけることはできなかった。

五時間目の授業。お昼休みでお腹がいっぱいになった生徒には辛い時間だ。教室のいたるところで眠気との格闘が始まっている。

しかし、今日に限っては麻由は眠くはならなかった。

なぜ先輩はいなかったのだろう。昼休みの偵察で唐沢先輩が教室にいなかったことがずっと気になっている。

「じゃあ、問題集P92の問題5を解いてみてください。制限時間は10分」

教師の指示に生徒たちは一斉に問題集を広げる。しかし麻由はぼうっとほおづえをついて前を見たままだった。

先輩が昼休みにいなかったという事実。ひょっとしてもう食べ終わってどこかへ行ってしまっていたのだろうか。

いや、昼休みは始まったばかりだった。それはない。今日に限って購買部や学食にいったということもない。麻由は念のため、あのあと購買部と学食をのぞいていた。

「はい、終了。じゃ誰か前に出て解いてみて」

教師の制限時間を告げるのと同時に、麻由はやっと答えがわかった。もちろんこの答えは先輩が教室にいなかったことに対するものだ。

それは当たり前すぎる答え。おそらく、先輩は今日学校を休んでいる。

私がラブレターを渡そうとした特別な日。先輩が学校にきていることは外すことのできない前提条件だった。先輩は絶対に学校にきている、そう思い込んでしまっていたため、学校を休んでいるという考えにいたるのに時間がかかってしまった。たしかに、冷静に考えてみれば唐沢先輩は休んでいる、それ以外に考えられない。

その考えにいたった瞬間、麻由は元気よく手を上げた。

「お、小倉、めずらしいな」

「先生、気分が悪いので保健室にいきます」

てっきり黒板で問題を解いてくれると思った教師は一瞬麻由が何を言っているのかわからなかった。唖然としている教師を気にするまでもなく麻由はすぐに教室を出て行った。

保健室は一階にある。麻由の足は階段を上がっていた。

昼休みと違って、授業中の廊下には誰もいない。

授業中でもいなくなったら確実に休みだろう。麻由はまた先輩の教室の前にいた。

唐沢先輩の教室の前に来たところで、顔はできるだけ動かさないようにちらりと中をうかがった。

窓から二列目、後ろから三番目、唐沢先輩がいるべき席には誰もいなかった。やはり先輩は欠席しているようだった。

保健室には生徒は誰もいなかった。

「少し気分が悪いです」

麻由がそう伝えると、保健の教諭はベッドに寝るようながして棚から体温計を出して渡してきた。

麻由は体温計を脇に挟んで横になる。自然と今朝からのことを思い出していた。

家を出る時、理由を知らない母親は早く起こされたことにふてくされて今日は雨でも降るのかしらと皮肉を言っていた。誰もいない校庭は新鮮だった。先輩の教室に忍び込んだときすごくドキドキした。鞆から手紙とプリンを取り出す。手紙を読んだらどう思うだろう。プリンは気に入ってくれるだろうか。入れるとき手が震えた。

麻由は先生に聞こえないように小さくため息をついた。寝返りをうって布団をかぶり直す。

あんなにドキドキしたのに唐沢先輩は欠席していた。なんだか、はしゃいでいた自分がバカのように思えてきた。勝手な言い分だけど、こんなに私をドキドキさせておきながら、大事なときに休んでしまうなんて唐沢先輩はずるいと思う。だけど、自分の誕生日に学校を休んでしまった先輩をちょっと可愛くも感じた。

手紙の内容を思い出す。顔が赤くなるのが自分でわかった。よくもまああんな恥ずかしい手紙を書いたと思う。夜書いたラブレターを朝読み返すと恥ずかしくて破ってしまった、なんて話をよく聞くがその気持はよくわかる。プリンすることも思い出す。先輩がプリンが好きというのを知ってプレゼントにあげようと思った。せっかくあげるなら手作り決め手一ヶ月前から何個も試作した。母親はこの一ヶ月でプリンが嫌いになったと言っていた。

そこで麻由は大変なことに気がついた。

私は先輩の机の引き出しにラブレターを入れた。そしてそれを受け取るべき先輩は今日学校を休んでいる。当たり前のことだがラブレターがまだあそこに存在している。まあ手紙の方はまだいい、誰かに見られる危険性はあるが置いていてもそんなに問題はない。

問題はプリンの方だ。

その事実に思い至ったとき、思わず麻由はベッドから体を起こした。それに保健の先生はびっくりして大丈夫？と麻由の寝ているベッドにかけよってきた。麻由はあわてて大丈夫ですと返すとまた布団の中に潜り込んだ。

プリンを回収しなければ。

保冷剤を入れておいたけれども、それは最長でも先輩が家に持って帰るまでしかもたないだろう。明日にはどうなってしまうのだろう。考えただけでも恐ろしい。

そんなものを先輩の机に入れておいたら、叶う願いも叶わなくなる。

麻由はいますぐにでも先輩の教室に向かいプリンと手紙を取り戻したくなっていた。

しかしそれはできない。授業中だし、休み時間になったとしても人がいる。そんな中教室に入っていきなことなんてもちろんできない。朝と同じように誰もいなくなってからじゃないと。

はやく放課後が来て欲しい。麻由はベッドのなかでそう願った。

携帯電話を開き時間を確認する。

ホームルームが終わって三十分。麻由は手持ち無沙汰にブラブラと学校の中を歩き回っていた。

いつものなら寄り道をしている時間だ。

部活に入っていない麻由にとってこの時間の学校にいることは新鮮だった。クラス全員で文化祭の準備とか、そういうイベントがない限り放課後まで残ることはない。部活もしていないのに放課後までだらだらと意味もなく学校に残る人達をみると麻由は何をしてるんだろうと思ってしまう。遊ぶなら遊ぶで学校の外で遊べばいいじゃないか、そういう考えをもっているからいつもホームルームが終わるとさっさと学校から出ていってしまう。

麻由は戸惑っていた。今日のような放課後の学校に残らなければならない、しかもひとりで残らなければならないとなると、どうやって時間を潰せばいいかわからない。教室でひとりじっとしているのも変だし、普段本を読まないから図書館に行っても意味が無い。だからとりあえず手持ち無沙汰に歩いているのだ。

校庭をみると部活動に汗を流す生徒たちがたくさんいた。見知った顔も何人か見える。麻由はそそくさと校舎の中に入った。今の自分はあまり見られたくない。

携帯電話を開く。そろそろ大丈夫だろうか。放課後の時間が始まって45分になろうとしていた。麻由は少し迷ってから先輩の教室に行くことに決めた。

もしまだ教室に人がいたら、と考えもしたが、とりあえず気にしないことにした。

先輩の机からラブレターとプリンを回収する。

プレゼントを受け取ってもらうこともなくを自分で回収しなければならないというのはなかなか馬鹿らしい。麻由はとぼとぼと教室へ向かった。

昼休みとは逆に新校舎の三階に上がって渡り廊下にてた。渡り廊下から旧校舎につながるドアの窓から教室の様子をうかがった。

運悪く、教室の中には女生徒がひとりだけ残っていた。

気付かれないように注意しながら彼女を観察する。彼女は机の上にノートを広げて勉強しているようだった。

早く帰ってくれないかなと思った矢先、麻由は一つのことを気づいた。彼女の座っている席は窓側から二列目、後ろから三番目。

「なんで唐沢先輩の席に」

麻由の心臓の鼓動がまた速くなった。

髪の毛は長く腰まであるだろう。顔はキレイ系だ。麻由と比べると一年の歳の差以上に大人びて見える。手足はすらっとして、座っていて確かではないがおそらく麻由よりも身長は高い。

「何をやってるの？」

先輩の机で何か変なことをしないだろうか。

観察を始めて30分たったころだろうか、その生徒はおもむろに机に広げたノートを鞆にしまい、何事もなかったように教室を出て行った。渡り廊下はいつのまにか涼しくなっていた。

彼女が出ていくと麻由はすぐさま渡り廊下から移動し、唐沢先輩の教室へ入った。

すぐに目的の席に移動する。

彼女はいったい何をしているのだろう。さきほどまで彼女が座っていた机をまじまじと観察する。しかし、変わったところは特に見当たらない。手紙とプリンは大丈夫だろうか。麻由の心は不安にかられた。椅子を大きく後ろにずらして机の前にしゃがみ込み視線を引き出しに合わせる。

そこにラブレターはなかった。

ひょっとしたら暗くて見えないのかもしれない。麻由は中に手を入れ引き出しの中を探した。しかし手に触れるものはなにもなかった。

背中に嫌な汗が出てくるのを感じた。

朝忍ばせた手紙とプリンがない。

教室を出て行った生徒の顔を思い出す。こんなことなら声をかけておくべきだった。

そのとき、ガラッと教室のドアが開く音がした。

見るとそこにいたのは、白衣の美術教師、ラボルト先生だった。

「あれ、いない。ねえ君、添嶋くんしらない？」

返事ができなかった。手紙がなくなってしまったこと、そしてラボルト先生の突然の出現に息をするのをしばし忘れた。

ラボルト先生はそんな麻由の様子を見て「ごめんごめん、驚かせてしまったかな」と笑顔を作った。

嫌な人に会ってしまった。整いすぎた顔、高い身長、どこか遠くを見つめているような澄んだ色素の薄い瞳。自分と比べると同じ人間とは思えない。この人を見るといつも劣等感を刺激されてしまう。

何も答えない麻由をラボルト先生は困った顔で見ていた。そしてあることに気づいた。

「二年生、だよな」

麻由の高校では襟章の色が学年ごとに違う。一年生は黄色、二年生は赤、そして三年生が紺。麻由の襟章の色は赤だった。

ラボルト先生の声が教育者の声が変わっていた。

「ここで何をしていたんだい」

まずい状況になってしまった。放課後の三年生の教室になぜか二年生の生徒が一人にいる。あやしまれてしまうのかもしれない。

しかし私は悪くない。どう説明したらいいだろう。私はただプリンを取り戻しにきただけだ。だが、それを先輩ではない誰かに言うのは嫌だ。

「わ、どうした？あれなんか変なこと言っちゃったかな」

どうすべきか悩んでいたら、ラボルト先生の慌てる声をした。どうしたんだろう。ラボルト先生のあたふたする様子は普段の様子からは想像できない様子で、この人も慌てることがあるんだなと思った。

ラボルト先生は白衣のポケットからなにかをとりだした。それはハンカチだった。麻由はやっと気づいた、泣き出してしまっていることに。

麻由はとりあえず座らせられた。そこは先輩の席だった。ラポルト先生も麻由の座った席に座っていた。

きっと悔しかったのだろう。麻由は自分が涙を流した理由をそう分析した。

「なにがあったのいったい」

ラポルト先生と聞いた。

麻由は今日の話を話してみた。朝早く学校に来て誰もいない教室に忍び込みあこがれの先輩の席に手紙とプリンを忍ばせたこと。昼休みに気になって先輩の教室まで見に来たこと。先輩が見当たらなかったのが授業中に気分が悪くなったふりをしてもう一度確かめに来たこと。学校を休んでいることを知って放課後を待って手紙とプリンを回収するためにまた教室に忍び込んだこと。

そしたら、そこにはすでに手紙とプリンがなかったこと。

「ラブレターがなくなったと」

話を聞いたラポルト先生はすこし興味を示したようだった。

「本当にこの席だったの」

「はい、窓から二列目、後ろから三番目。間違いないです」

もう涙は止まっていたがまだ鼻声のままだった。ラポルト先生は腕を組んで何か考えているようだった。

さっきの光景が頭によみがえる。先輩の席に座ってたあの女。思い出したらまた悔しくて涙が出そうになった。

「多分、盗まれたんだと思います」

意を決して麻由はそういった。

「私が忍びこむ前に女の人がここにいたんです。多分、その人に盗まれたんだと思います」

「放課後の教室だからね。だれかいるのは普通なんじゃない」

ラポルト先生の声は冷静だった。それが麻由には腹立たしかった。あの女に間違いないのに。

「でも、その人先輩の席に座っていたんです。私が来てからもずっと。きっとその人も先輩のこと好きで、私が手紙とプリンを席に入れたのに気づいたんだと思います」

興奮した麻由の声に反して、ラポルト先生の顔は納得していなかった。

「本当なんです。あの人なんです。髪が長くて、手足がすらっとしてて背が高い人でした。真面目そうな顔してきっとあの人が」

そう言った時麻由はあることを思い出した。

「あ、私見たことあります。柿山香代って人だと思えます。そういえば聞いたことあります、彼女が先輩のこと好きだって噂」

それを聞いてようやくラポルト先生は驚いたようだった。

その後すぐ、麻由はラブレターを見つけることができないまま教室をあとにすることになってしまった。ラポルト先生は戸締りを確認していくからともう少し教室に残った。

失礼しますとラポルト先生に挨拶をして教室を出るとすぐに廊下を走った。麻由の足取りは荒々しかった。

### 3.

「ラポルト先生いますか」

時間は六時過ぎ。昼の暑さでは気づかないが、この時間帯になると夏も終わり秋が始まってきているのだと感じる。いつもと比べて遅い時間、美術教官室のドアを明けてみると、そこには誰もいなかった。

失敗した。添嶋駿は反省した。

授業もホームルームも全部終わり、また将棋でも指しに行こうかなと考えているとクラスメートの根岸が数学を教えて欲しいと声をかけてきた。

特に用事もなかったのでつきあうことにした。実をいうと用事はしっかりあったのだけれどすっかり忘れていた。

集中できるだろうと教室をあとにして根岸といっしょに図書館に行くことにした。そしてわからないところを教えていたのだが、これがうまくいかない。言っちゃ悪いが根岸の覚えが悪い。こちらとしては丁寧に教えているつもりなのだが理解してもらえない。

なかなか理解してくれない根岸を見ていて、自然と昨日のラポルト先生とのやりとりが思い出された。自分がすんなり理解出来てしまっていること理解させるのは難しいという話だ。

ほんとそうだよな。そう思った次の瞬間、やっと思い出した。昨日帰るとき、ラポルト先生から明日帰りによって欲しいと言われたことを。

しまった。昨日は早過ぎる投了のこと頭がいっぱいになっていて上の空だった。まずいことになってしまった。ラポルト先生のことだから、約束を忘れてしまっていたことについて怒ることはおそくないだろう。しかし、いつまでもネチネチと言われるのは確実である。まだ怒られる方がましである。

根岸に急用を思い出したと告げ図書館から急いで戻る。

しかしラポルト先生は部屋にはいなかった。

さて、どうしたものかな。

先生の机を見るとまだ鞆があるのでまだ帰ってはいないようだ。どこに行ってしまったのだろうか。ラポルト先生はじっとしていられないところがある。なかなか自分が来ず、待つことに飽きてしまってどこかをふらふらしているのかもしれない。

探しに行くか？

だが、ちょっと考えた結果、待つことにした。自分まで探しに行くと入れ違いでなかなか会うことができなくなってしまうおそれがある。こういう時にはどちらかはじっと待っている方が良い。

いずれ帰ってくるだろう。それにきつとどうせ大した用事でもないだろう。

駿は落ち着いた様子でソファにすわった。

急に切り上げることになってしまって根岸にも悪いことをしてしまったな。明日埋め合わせをしよう。

ソファに座ってそんなことを考えているとドアが開く音がした。

ラポルト先生すぐ帰ってきたなと思って振り向くと、そこにいたのは美術部員二年生、柿山香代だった。

「添嶋先輩、いらっしゃいますか」

柿山さんのあいさつはいつもどおり丁寧だ。しかしいつもと違うのはラポルト先生ではなく駿のことを尋ねてきたことだ。柿山さんとの付き合いはラポルト先生より長く、彼女が美術部に入ったときからののだが、駿のことを尋ねてきたのは始めてだ。

「どうかした？柿山さん」

「さっき、ラポルト先生が探してましたよ」

聞くと、ラポルト先生は駿のことを探していて、美術室で石膏デッサンをしている香代に駿のことを見かけていないかどうか尋ねてきたそうだ。もちろん見かけていなかったのだから、知らないと答えたが、そのままデッサンを続けているとドアの窓から駿が美術教官室に入っていくのが見えたのでわざわざ伝えに来てくれたらしい。

「ありがとう、柿山さん」

律儀な香代に感謝した。

行き先を聞いているかと思い「ラポルト先生どこにいるか知ってる？」と尋ねてみたが返事は芳しくないものだ

った。

ラポルト先生が自分を探していたということはわかったが、その当の本人がいまどこにいるのかはわからない。結局どうすることもできないので駿はそのまま美術教官室で待つことにした。

しかし手持ち無沙汰だ。何もすることがない。しょうがないからけっこう散らかってるなと部屋の中をきょろきょろと見てみると、柿山さんに遠慮がちに話しかけられた。

「あの、添嶋先輩すみません」

まだ香代がそこにいたことを少し意外に思いながらも香代の方を向くと、これまた意外なことを聞かれた。

「唐沢さんって今日お誕生日でしたよね？」

唐沢とは駿のクラスメートで友人でもある。確かに今日、誕生日のはずだ。しかしついてないことにみんなに祝われるその日に風邪を引いて休んでいた。

なぜ香代から唐沢の名前が出てくるのだろうといぶかしんでいると、それが顔に出てしまったのだろうか香代はすぐに「すみません、変なこと聞いてしまって」と謝った。

よく見ると香代の顔は耳まで真っ赤になっている。それでなんとなく察した駿はそれ以上詮索することをやめた。

「唐沢は今日休んでたよ」

そのことを伝えると、香代はちょっと気の抜けた様な顔をして「そうですか」と少し残念な顔をした。

なぜかはわからないがすこし気まずい。

どちらとも黙ったまま会話を切り出せずにいると、香代は「お邪魔してすみませんでした、部活に戻ります」と言って美術室へ戻ろうとしたが、思い出したように駿の方へ向きなおし「今の話誰にもしないでください」と一言告げて、今度こそ美術室へ戻っていった。

駿はその帰っていく背中をみてなんだか複雑な気持ちになってしまった。

「添嶋くんここにいたのか」

美術教官室で待ち始めて二十分ぐらいたったころラポルト先生は帰ってきた。手には小さな白い箱をもっている。

「すみませんでした。約束すっかりわすれてしまって図書館にいました」

「ひどいなー添嶋くん」

言葉とは裏腹にラポルト先生は笑っている。

「それなんですか」

駿が先生の手にある白い箱についてたずねると、

「多分プリン」

そう答えて、部屋にある冷蔵庫に入れた。そして入れ替わりに別の箱を冷蔵庫から取り出した。それを持って駿の目の前のソファに座った。

「すまないね、呼び出したりして」そう言いながらその箱を机におき中身を開ける。

チーズケーキだった。

「どうしたんですか、これ」

「西田先生からのお土産」

西田先生とは去年まで駿の高校に務めていて定年退職されたラポルト先生の前任にあたる美術教師だ。駿はもちろん、ラポルト先生も西田先生の教え子である。

「なんか、旅行に行ったらしいんだ、北海道に。で、律儀にもおみやげを買ってきてくれたんだけど、一人では食べきれない量でね。だからおすそ分け」

「それなら柿山さんとか部員のかたにおすそ分けすればいいんじゃないですか、わざわざ僕じゃなくて」

「もちろんおすそ分けしたよ。それでも消費し切れなかったから添嶋くんにもね。ひょっとして自分だけだと思った？特別だとも思ってるの」

いちいちカチンとくることを言う人間だ。それならばわざわざ来なくても良かった。

その様子を見て、ラポルト先生はまた少し笑った。

「うそうそ、お土産に西田先生からの手紙も添えられていてね。添嶋くんにもよろしくお伝え下さいってあったから」ポケットから一枚の絵手紙を取り出した。優しいタッチで大きくカニが書いてある。差出人は西田先生で宛先は添



嶋駿。切手を貼っていないところを見るとお土産と一緒に送られてきたものだろう。何故にカニと思いつつも西田先生らしいと純粋にうれしかった。

「ありがとうございます」と礼を言うと先生は紅茶でもどうだいと駿に返事を聞く前に電気ポットのある方へ歩いていった。

先生が紅茶を入れてくれた紅茶と一緒にチーズケーキを食べた。チーズケーキは甘くて濃厚で美味しかった。

チーズケーキを食べ終わると、思い出したような感じでラボルト先生が話しかけてきた。

「添嶋くん、クラスに唐沢くんって子いる？」

駿は軽く既視感を覚えた。

「なんか唐沢大人気ですね。いますよ。あ、でも今日は休んでましたけど」

「やっぱりそうなんだ」

一日に唐沢について二度も聞かれた。

「なにかあったんですか」

そう聞くと、先生は話そうか、話すまいか迷っているようだった。

「プライバシーの問題があるからなかなか話づらいんだけど」

なかなか踏ん切りがつかないようだったが結局は話しはじめた。

「さっき添嶋くんを探しに教室に行ったときに、ちょっとしたことがあったんだよ」

そう言ってラボルト先生は話し始めた。

放課後になってもなかなか部屋に現れない駿を先生は教室に迎えに行ったのだそう。教室に入るとそこには駿はいなかった。そのかわりに一人の生徒がいたらしい。その生徒に駿のことを尋ねたのだが、どうも様子がおかしい。よく見るとその生徒は二年生。これは怪しいと生徒に事情を聞こうとすると生徒は泣き出してしまった。なんとかそれをなだめて事情を聞くと、ある生徒にラブレターをだしたその生徒はとある事情でそのラブレターを取り戻しに来た。しかし、そこにはもうラブレターはなかった。

個人のプライバシーを尊重して駿の教室に忍び込んだ女生徒の名前や宛先人の生徒の名前は伏せられていた。だけど、さすがに駿もバカじゃない。女生徒の名前はわからなくても宛先人の生徒はわかる。唐沢だ。

「なんでまたわざわざラブレターを取り戻しに来たんですか」

「ラブレターと一緒にプレゼントを置いておいたらいいんだけど、それが生ものだったんだよ」

なるほど。確かにそれならば置いたままだと次の日には大惨事になってしまう。好きな人のためにと思って忍ばせたプレゼントがとんだ迷惑になってしまう。しかし、何をプレゼントしたのだろうか。

朝にはあったラブレターが夕方には消えてしまった。これはちょっとしたミステリーだ。他人事だとおもしろい。当の本人にしてみれば重大事件なのだろうけれど。

「どこに行ったんでしょうね」

なんともなしにそう言うと、ラボルト先生は「見つかったよ」とこともなげに言った。

「え、見つかったんですか」

「うん、中をあらためてないから絶対とは言い切れ無いけど、間違いなく彼女のものだと思う」

そう言って先生はちらりと冷蔵庫の方をみた。先ほど先生の手握られていた白い箱を思い出す。

「さっきの白い箱がそれですか？」

そう、と先生はそっけなく言った。そうだとしたら問題は解決である。その生徒に返してあげれば問題は解決だ。

「じゃ、とりあえず問題は解決したんですね」

「確かに解決はしている。だけどちょっと気になるところがあるんだ」

ラボルト先生の顔は浮かなかった。

駿はその事件に対して興味が湧いてきた。

「なくなったものが先生の手元にあるってことは誰かに盗られたんじゃないんですね」

「そう。もっとも彼女はしきりに盗まれたと主張していたけどね」

「盗られたんじゃないってことは、どこかにあったんですね」

はたしてラブレターはどこにあったのか。

駿が興味をしめしたことに気づいたのか、ラボルト先生は少しうれしそうにしている。

「一日中の教室にいた添嶋くんならわかるはず」

一日中教室にいたことが重要。確かに誰か盗まれていたとしたらその現場をみている可能性は高い。だが、さっき先生は盗まれたわけではないといった。いったいどういう事だろう。

「じゃ、もう少しヒント。これは問いの立て方に問題がある。この事件の問いは、『手紙は誰に盗られてしまったのか』や『なぜ手紙はなくなってしまったのか』ではない。正しい問いは『なぜラブレターはそこに存在しなかったのか』だ。もう一度朝学校に来てから放課後になって教室を離れるまでをしっかりと思い出してごらん」

駿は腕を組んだ。朝からのことを詳細に思い出そうと努力した。

一時間目から授業を順番に思い出す。しかし、授業中に特別なことは何もなかった。授業に関して言えば今日は体育の授業も芸術の授業もなかったから生徒が教室から離れることもなかった。それでは昼休みになにかあったか。しかし昼休みもいつもと変わらなかった。

うんうんうなっていると先生がもう一つヒントをくれた。

「その生徒の話から考えるに、多分、その事件が起きたのは帰りのホームルームになるはず。」

そう言われて駿は帰りのホームルームを思い出す。そしてそこで行われたことを思い出してすべてを理解した。

「なるほど、そういうことですか」

わかってみれば単純なことだ。

「うん、そういうこと」

ラボルト先生は満足気に駿を眺めた。

「分かってみれば至極単純。だけど、その場になかった人にとってはまるで神かくしのよう」

「いつ気づいたんですか？」

「話を聞いたらすぐに。多分そういうことじゃないかなって。でもさすがにどの机かわからなかったから、申し訳ないと思いつつ全部の机を調べてみたら見つかった」

「すぐに気づいたのなら教えてあげればよかったじゃないですか」

「いや、教えてあげようと思ったんだけどね、なかなか話を挟みにくい雰囲気をもっててね。それにちょっと気になることを話し始めてね」

ラボルト先生は困ったような顔をしている。

「その気になることって何なんですか？さっきも言っていましたけど」

ラボルト先生は頭をかいて言った。

「教室にいた彼女はラブレターを盗まれたといったんだ。まあ、そう言うのも確かにうなずけるよね。朝置いたはずものがなくなっているのだから。ましてやそれをおいた場所に直前までだれかがいたのを見たならばなおさらだ。多分その人が犯人に違いないと思うだろう。だけど、おかしなことに彼女はラブレターを奪った犯人を名指ししたんだ。しかも、その口ぶりからすると彼女はフルネームで名指しした犯人をまったく知らないようなんだ」

そこでラボルト先生は天を仰いだ。

「なぜ彼女はそんなことを言ったんだろう」

先生はそのまましばらく天井を見つめていた。

「添嶋くん、なんでだと思う」

「本当に犯人と名指しした人間のことは知らなかったんですか」

「うん。間違いない。どうやら直前に人がいたことは間違いないようなのだけれど、その人物と犯人と名指しされた人物は同一人物ではない」

「じゃ、その犯人と名指しされた人物が、人のものを盗むようなやつだという噂があった」

「それは断じて違う」

先生がめずらしく強い口調で否定したので、そのことについてそれ以上は聞けなかった。

「珍しいですね、そんなに先生が悩むの」

「失礼だね添嶋くんは。僕は年がら年中悩んでいるよ。悩める子羊だよ」

セリフはいつもの軽口だが、顔はいつもの笑顔ではなかった。

美術教官室に来たのが6時を過ぎていた。ラボルト先生の話に付き合っていたら外はもう暗くなっていた。まだ先生

は考え込んでいる。

「すみません先生。そろそろ失礼します」

考え込んでいた先生は、窓の外を見た。そしてけっこうな時間がたっていることに驚いていた。

「こんな遅くまで付きあわせてしまって申し訳ない」

「チーズケーキごちそうさまでした」

「たまには西田先生のところに遊びにいつてみようか」

それでは失礼しますとあいさつしようとしたとき、先生の後ろ、部屋の隅にある冷蔵庫に目が止まった。

「見つかった手紙とプレゼントはどうするんですか」

「明日、彼女に返すことにするよ」

先生の言葉は少し歯切れが悪かった。先生の中では問題はまだ完全に解決したわけではないようだ。

「だけどずるいですよね唐沢ばかり」

「え、なんで唐沢くんだってわかったの」

「わかりますよ。直前に唐沢について質問したじゃないですか」

先生は照れくさそうに頭をかいた。

「唐沢くんってのはずいぶんモテるのかい」

「いや、そういうわけではないと思うんですけどね」

無骨で無口な唐沢の様子を思い出す。あんな無愛想な男を好きになる女の子もいるもんなんだな。世の中不思議だ。そんなことをつらつらと考えていたら、ラポルト先生の元気な声が聞こえてきた。

「唐沢くんってのはお世辞にもモテるタイプじゃないんだね。じゃあ添嶋くんはなんで今『唐沢ばかり』って言ったんだい？」

いつのまにか先生の顔がいきいきとし始めている。

「ひょっとして添嶋くん、私が話した彼女以外に、唐沢くんのことを好きな人を知っているのではないかい」

まずい。柿山さんとの約束が頭をよぎり、どう答えていいかわからず黙ってしまっている駿にラポルト先生は言った

。

「それはひょっとしてカヨちゃんなのではないかい？」

香代の名前が出てきてしまったことに驚き駿は何も言えなかった。だけどそれはラポルト先生にとっては十分な答だったようだ。

「ありがとう添嶋くん。わかったよ」

後ろを振り向きラポルト先生は冷蔵庫の方へいった。冷蔵庫をあけ先程もってきた白い箱を開けた。そこから取り出したものはプリンだった。

うれしそうにソファに座り、先ほどチーズケーキを食べたスプーンで持ってプリンを一口パクリと食べはじめるとラポルト先生。

「なにしてるんですか、先生」

「添嶋くん、なかなかおいしいよ」

「そのプリンって彼女が唐沢に渡すはずだったやつですよ。勝手に食べてしまっていいんですか」

駿の心配をよそに、先生はプリンを食べるのをやめない。

「いいんだよ、添嶋くん」

ラポルト先生はスプーンで駿の方を指さしながらこう言った。

「ラブレターの彼女にこのプリンを唐沢くんに渡す権利はない」

## 4.

ドアを開ける。もちろん誰もいない。昨日と同じ時間。小倉麻由はまた先輩の教室に忍び込んでいた。

二度目の今日は昨日ほどは興奮してない。

せっかく送った手紙とプレゼントは何者かの手によってなくなってしまった。先輩に見られることなくどこかへ行ってしまった。

「今日こそは大丈夫」

カバンからラブレターを取り出す。

同じ内容のラブレターを書き直すことは思いのほか寂しい経験だった。こんな経験をすることになるなんて。手紙を盗んだ犯人を恨む。

窓から二列目、後ろから三番目。目的の机のところに行き、引き出しを手で探る。

その手に何かがあたった。

無意識に嫌な顔になってしまう。嫌な予感がする。

引き出しの中の異物を取り出す。手の中のものを見ると昨日と同じ「ゴミ」だった。

まったくもう、やめて欲しい。先輩がかawaiiそうだ。犯人は分かっている。

麻由は「ゴミ」を手でちぎってくしゃくしゃにしてポケットに入れた。

机の前に屈みこみ、引き出しの中を確認する。引き出しの中は綺麗になっていた。

ハート型の封のハートの尖った方を手前に、きちんと見えるようにして引き出しの中ほどにおいた。プレゼントのプリンは今度は入れないことにする。昨日の失敗から学んで、プリンは手渡しにしようと思っていた。

「今日こそは」

麻由が手をあわせて祈ったとき、教卓のあたりで人の気配がした。

反射的にそちらを振り向く麻由。するどい既視感におそわれる。そこにいたのは白衣の美術教師、ラポルト先生だった。

「おはよう小倉さん」

「…おはようございます」

ラポルト先生はきょろきょろと教室を見回しながら、麻由に近づいてきた。

いったい先生は何をしていたのだろう。自然と態度がこわばったものになってしまった。

「朝の教室って気持ちいいね」

昨日もそうだったが、この先生の考えることはわからない。やはりこの人は苦手だと麻由は思った。

「なにしてるんですか先生」

耐えきれずそういった麻由にたいして、ラポルト先生は振り返り、

「もちろん小倉さんに会いに来たんだよ」

笑顔でそういった。

麻由は笑い返すことはできなかった。先生に気付かれないように生唾をのんだ。

「正確に言うと会いに来たというのはまちがいで察しの通り君を待ち伏せしていたんだけどね」

まさか教卓の裏に隠れていたというのか。麻由はラポルト先生に軽蔑の目を向けたが、まったく気にしていないようだった。

「いやあ、小倉さんがこなかったらと想像するとゾツとしたよ。このクラスの生徒がやってきて朝の挨拶を爽やかにかわす。その雰囲気の中、なかなか出られなくなってしまう私。どうしようとまごまごしていると担任の先生、このクラスだと益川先生かな、がやってきてホームルームが始まってしまう。だけどそこでバレたならまだまし、そのまま気づかれずに授業が始まってしまったら」

「なにがいいたいんですか」

見えない話に、麻由は次第にイライラしてきた。

「言いたいことがあれば言えばいいじゃないですか」

いったい何の目的があって私を待ち伏せしていたというのだ。麻由は腹立たしかった。麻由の恋を邪魔する誰もが。

「確かに誰もいない教室に忍び込むのは怪しく見えるかもしれないですけど、別に私は悪いことはしてません。それとも先生は好きな人に手紙を渡すことがいけないことだというんですか」

ラボルト先生何も言わなかった。笑顔のまま麻由を見ていた。だが、その目は笑っていなかった。ラボルト先生は手近にあった机に腰掛け、校庭の方を見た。そしてそのまま麻由の方を見ずに話を始めた。

「もちろん恋をするのは悪いことではない。いやそんな否定形でいうのは間違いだ。恋をするのはいいことだ。ひたむきに好きな人のことを考える。その時間の素晴らしいこと。自分以外の人間がこれほど気になるなんて、それは認識のコペルニクス的転回だ。もし私が小倉さんの友だちなら、なにをあげても応援したいと思う」

「だけど、とそこで先生は麻由のほうへ振り向いた。その視線はまっすぐ小倉さんの目を捉えていた。

「だけど、私は教師だ。だから生徒が間違った方向に進もうとしていたらそれを正す責任がある。もちろん君が人間であるように、私もただの人間だ。君が間違いで私が正しいなんてことは絶対ではない。ましてやそれを正さなければならぬと感じていることは、君にはとっては大きなお世話で、だいそれたことかも知れない」

先生はそこで息を吸った。一瞬沈黙の音がした。

「恋に正直なのはいい。だけど卑怯なのはいけない」

お互い何も言わなかった。まるで刀の切っ先を向い合って間合いを測るように。

我慢できずに先に口を開いたのは麻由の方だった。

「先生のおっしゃっている意味がわかりません」

「じゃ、順を追って説明していこう」

ラボルト先生は白衣のポケットから何かを取り出した。なにかのカップのようなものだった。麻由はそのカップに見覚えがあった。

「君に返すために持ってきたんだ」

「なんで先生がそのカップを持っているんですか」

「わからないかい？美味しかったよプリン」

ラボルト先生の手からひたたくるようにカップを奪い、まじまじと調べた。やはり確かにこれは私のものだ。

「お分かりの通り、それは君が昨日、唐沢くんにプレゼントしようとしたプリンが入っていた容器だ」

「中身はどうしたんですか」

「食べた。美味しかったよ」

「どうして食べたんですか？いや、別に食べたことはどうでもいいです。なぜ先生がこれを持ってるんですか」

ラボルト先生は答える代わりに、軽く首をかしげた。その仕草は麻由をさらにいらつかせた。

「ひょっとして先生が犯人なんですか？」

「残念ながら犯人ではない。私は見つけて預かっていただけだ。そのプリンをどこで見つけたのかを今から説明していこうと思う」

そう言うラボルト先生は教卓の方へ歩いていった。そして教卓に手を付き、その様子はまるで授業を始めるようだった。

「小倉さん、席遠いけど聞こえるかい」

その声はしんとした教室によく響いた。しかし、何も答える気はなかった。ただ腹立たしかった。

「じゃ、何が起こったかをちゃんと整理していこう」

チョークを手に取り横に大きく矢印を書いた。矢印の先には小文字でtと書いて時間軸をあらわした。「これ、やってみたかったんだよね」ラボルト先生はどこか楽しそうである。

「まず、早朝。誰もまだ登校していない時間に小倉くんがここにやってくる」

直線の左側、原点に近いところに印をつけ、その下に「小倉さん侵入」と書いた。その単語に麻由はムツとした様子だったが何も言わなかった。

「そして、小倉さんは唐沢くんの机に手紙とプレゼントを入れ教室をあとにする」

先ほど書いた「小倉さん侵入」の下に「手紙、プレゼント」と加える。

「その後、通常通りの授業が始まり、お昼休みになる。お昼休みになってプレゼントへのリアクションが気になったため小倉さんはまた教室へ来た」時間軸の真ん中頃に「昼休み 偵察」と付け足した。

「お昼休みには教室には人がたくさんいるのももちろん中には入れない。外から見ることしかできなかった。そして君は唐沢くんがそこにいないことに気づいた」昼休みのところに「唐沢くん不在」と書き足す。

この間、麻由はひとことも発しなかった。ただラポルト先生を睨みつけていた。

「なぜ唐沢くんが昼休みになかったのかを考えていくうち君はひとつの答えに達する。すなわち唐沢くんが学校を休んでいるということに気づいた。それを確かめるために君は保健室に行くと言って教室を抜け出し、わざわざこの教室の前を通り保健室へ言った。二度目の偵察の結果、唐沢くんが休んでいるということは確実となった」「五時間目 偵察2 唐沢くん休み」

「唐沢くんが休んでいることを知った君はラブレターを回収することにした。ラブレターはそのまま置いていても良かったけれど、いっしょに誕生日プレゼントして唐沢くんの好きなプリンも机に入れていた。そのままほっとけば次の日には大惨事になってしまう。しかし、すぐには回収にはいけなかった。なぜか、人がいるからだ。そこで君は放課後まで待って回収することにした」

時間軸に「午後の授業終了」と加えられた。

「放課後になってすぐに君は行動しなかった。どうせ、すぐに行ってもだれかいる可能性が高いから。ホームルームが終わって学校をぶらぶらして45分たった頃この教室へ帰ってきた。しかし、残念なことにまだこの教室にはひとり残っている人物がいた」

そう、あの女。あの女が私の大切なラブレターとプレゼントと盗んでいったに違いなかったのに。麻由は手の中のカップを見た。

「そして私と会ったと」

黒板に「私と遭遇」と書いてラポルト先生はチョークをおいた。

「さて、昨日の小倉さんの行動は整理できた。これで大方間違いないと思う」

麻由はまだカップを見つめていた。

「ではなぜこの事件は起こったのか。わかるかい小倉さん」

麻由は何も答えなかった。今朝先生に会うまでは昨日の女が盗んでいったに違いないと思っていたのだ。だが、それが間違いだったことはプリンのカップがいま手元にあることが証明している。

「この問題は分かっただけで何も不思議はないことなんだ」

教室は次第に明るくなってきていた。教室についてから結構な時間がたっている。

「そもそも、この問題は小倉さんが主張するような『だれがラブレターを盗んだか』でも、『どうしてラブレターがなくなってしまったか』でもない。この問題は『ラブレターがなぜそこに存在しなかったか』だ」

『誰が盗んだか』という問いが他のものと違うことはわかった。それに誰かが盗んだのではないということは事実として存在している。問題は次の二つだ。『なくなってしまった』と『そこに存在しなかった』、その二つに意味の違いがあるというのか。麻由はラポルト先生にそう言った。ラポルト先生は「全然ちがう」そう言って、先生は黒板に○を書いて、そして消した。

「小倉さん、なぜこの○印はなくなってしまったかな」

「先生が今消したからです」

「そう、その通り。それがどうしてなくなってしまったかの答え」

先生は次に黒板に何も書かずに麻由に聞いた。

「では小倉さん、なぜここに☒印は存在しないのか」

麻由は一瞬眉を潜めた。存在しないも何も、そもそも何も書いてない。何も書いていないのだから存在しないのは当たり前だ。麻由はすこし腹がたってきた。

麻由が何も言わないのでまたラポルト先生は話を始めた。

「元々何もなかった。だから存在しないのは当たり前。そして小倉さん、あなたの手紙も一緒。さて、ではなぜ小倉さんの手紙はその机の中に存在しなかったのか」

ラポルト先生は教卓の上にある座席表を手にとった。

「ここに座席表がある。この座席表を見ると確かにあなたが今座っている席には唐沢くんの名前が書いてある。けどもっと重要なことがこの座席表の一番上に書いてある」

ラポルト先生は座席表を麻由に見せるように左手で持ち、一番上のところを右手の人差指でさした。麻由は目が悪い

のでそこに何が書いてあるかわからなかった。だけど、わざわざ近くにいったらそれを見ようと思わなかった。

「セプテンバー。つまりは9月」

ラポルト先生は座席表の一番上に書いてある言葉を読み上げた

まだわからない様子の麻由にラポルト先生は言った。

「今日は十月一日。今日から十月」

ラポルト先生は今度は別の紙を取り出した。

「さすが益川先生。益川先生というのはこのクラスの担任の先生なんだけど、今朝職員室で会って聞いたらもう出来上がってるっていうからちょっと借りてきた。何かわかるかい小倉さん。ここにオクトーバーって書いてある。そう、十月の座席表」

なんとなく話が読めてきた。

「ようやく気づいてきたかな。簡単な話。君が五時間目に見にきたときにはまだ変わってなかったから、おそらく帰りのホームルームの時であってるだろう。このクラスはでは…」

麻由にはやっと答えがわかった。

「席替え」

答えを聞いてラポルト先生は微笑んだ。

「そう、席替え。だから正確に言うとなあなたの今座ってる席は唐沢くんの席ではない」

ラポルト先生は新しい方の座席表を見る。

「新しくその席に座ることになったのは、大河原悠子さん。おそらく昨日あなたが放課後に見た女生徒だろう」

たしかに席替えが行われたのならば、机ごと位置が変わっているのだから、いま座っているこの席に手紙がないのはあたりまえだ。

昨日の放課後見たあの人は自分の席に座っていただけなのだ。

麻由は事件の真相を正しく理解し始めていた。そして、理解していくうちに怖くなっていった。

「大丈夫かい、小倉さん」

青ざめているのが自分でもわかった。

「ごめんなさい、私」

「うん」

ラポルト先生はただ頷きただけだった。その様子は教育者らしいものだった。どうやらこの人はすべての真相を知っているに違いない。

その証拠にラポルト先生は「残念ながら問題は終わってはいない。私が君のことを卑怯だといった理由について触れていない」と言った。

言葉が出なかったも。さきほど破った『ゴミクス』ポケットの上から触った。

「私は昨日、君とここで偶然に会った。そして君からこの経緯を聞いた。君の主張はラブレターを盗まれたというものだった。たしかに、状況としては誰かに盗まれてしまったと考えるのはそんなに変なことではない。ラブレターはひとりでは動かない。まあ、昨日の場合はある意味ひとりで動いてしまったのだけれど。だから昨日君がラブレターを盗まれたといったことに特に不自然さは感じなかった」

遠くでスズメのなく声が聞こえた気がする。

「ところが君が話していくうちにあるところで不自然さを感じた。それは、君は泥棒のが誰であるかを名指ししたところだ。柿山香代という人がやったに違いない、君はそう言った。しかしこれは不自然だ。どうしてか。それは、君が名指しした柿山香代という人物を知らないのにそういうことを言ったということだ。小倉さん、あなたは昨日どう言ったか覚えているかい。柿山さんの風貌について」

麻由はゆっくりと思い出す。ラポルト先生はそれをゆっくりと待っている。

「髪の毛が長くて、背が高くて手足がすらっとしていて…」

ラポルト先生は麻由の言葉を途中で遮った。

「うん、大体そんなところ。だからこそ不自然なんだ。あなたの状況では先輩の席に座っている生徒は気になって当たり前だ。だからしっかりと観察する。観察したおかげで君はかなり細部まで彼女のことを覚えていた。あのとき私に対してもずいぶん詳細に説明してくれた。だからこそ不自然なんだ」

麻由は先生の目をしっかりと見つめることが出来なかった。

「なぜなら、もし本当に柿山香代さんをみていたとしたら、まずはそのメガネについてしゃべっているはずだから」  
たしかに昨日見た彼女はメガネをかけてはいなかった。

ラボルト先生は続ける。

「柿山さんは目が悪くて、かなりごついメガネをかけている。いわゆるビン底メガネというやつで、柿山さんの特徴を聞かれたら、普通ならまずそのメガネがでてくる」

麻由は立っているのが辛くなってきた。気をゆるめるときっと涙が出てくるに違いない。

「ではなぜ小倉さんは知りもしない柿山さんの名前を出して糾弾したのか。考えるとひとつの仮説が浮かび上がってくる。しかし、仮説はあくまでも仮説だ。だからひとつ罫を仕掛けさせてもらった」

人間として最低だね。ラボルト先生は自嘲気味に言った。

「そう、昨日と同じように唐沢くんの机、今日はもう大河原さんの机だけど、そこにある手紙を入れておいた」

麻由はポケットの中の「ゴミクズ」を取り出した。それは唐沢先輩に当てた手紙だった。

「君は昨日の朝、ラブレターを忍ばせに来た。すると驚いたことにそこには先客がいた。誰かがすでにラブレターを置いていたのだ。そこで君はそのラブレターを開けて読んだ。そこには柿山香代という名前があった。少し迷ったのか、それともまったく気にしなかったのかわからないけれど、その後は今日と一緒に。つまりは破いて捨てた」

ごめんなさい、と小さくつぶやくと同時に目から涙がこぼれてきてしまった。

「私が最初に卑怯といったのはこういう事だ。君が誰を好きになろうと誰にラブレターをだそうと私の知ったこっちゃない。だけどだからといって他の人ラブレターを、君と同じ純粋な心を奪うことは許されることではない」

ラボルト先生は麻由の方へゆっくり近づいてきて頭をなでた。

「ごめんね。厳しすぎることをしてしまったかもしれない。だけど、自分がしたことの重大さを感じて欲しかったんだ。卑怯なことをされた人間がどんな気持ちになるか」

麻由は細切れになったラブレターをみた。すべてが終わり冷静になってみると、そのラブレターには見覚えがあった

。

麻由の手の中にあっただのは、昨日先輩の机に入れた先輩宛のラブレターの無残な姿だった。



## 5.

---

「教師って難しいよね」

放課後、いつものように美術教官室にお邪魔し、いつものように将棋を指しているのだけれど、いつもと違って今日のラボルト先生はため息ばかりついていた。

昨日の帰り際、意気揚々とプリンを食べる様子からは想像できない。何かあったのだろうか。

心配になって「何かあったんですか先生」と聞いてみたら先の言葉がかえってきた。

「難しいですか教師」

「うん。難しいよ教師」

先生の顔はすぐれない。それはいつものハツラツとした様子からはかけ離れているものだった。

今朝何かあったな。

そう思ったものの、だからといって駿からなにか言えるはずもない。

とりあえず、粛々と将棋を進めていだけだ。

しかし、よっぽど何かにこたえたのか先生の指し手はぱっとしないものばかりだった。

勝負はすぐについた。駿の勝ちである。

駿は駒を片付ける。

するとラボルト先生がぼそとつぶやいた。

「怒るってむずかしいよね」

どうやら、今日誰かを怒ったらしい。おそらくそれは昨日の事件に関連してだろう。駿が止めるのも聞かず、先生は「プレゼントを贈る資格はない」と例の手作りのプリンを食べていた。その時はいつもの先生とかわりなかったようなのだけれど。

今日はこれ以上いても仕方がない、そろそろ帰ろうかと駿が思った時、ドアがノックされて一人の生徒が入ってきた。

「ラボルト先生いますか」

その女生徒に駿は見覚えがあった。少し時間がかかったが思い出した。昨日の昼休み駿の前の教室を熱心にのぞいていた生徒だった。

あまり聞かれたくない話だったようで、ラボルト先生と生徒は部屋から出て行った。

何か話したそうにしている生徒を見て、駿が出ていきましようかと部屋を出ることを提案したのだけれども、ラボルト先生はそれを制して生徒の元へ走っていった。

帰りそびれたかな。留守番を覚悟した駿だったが、ラボルト先生はすぐに戻ってきた。ラボルト先生の顔は少し晴れやかになっていた。

「そろそろ帰ります」

先生は回復したようだったが、いい時間になってもいたので駿は帰ることにした。

駿がソファから立ち上がったとき、ラボルト先生に「添嶋くんありがとね」と言われたのだけれど、駿には何に對してお礼を言われたのかわからなかった。

「またあしたもきてくれるかな」

部屋をでようとする駿に対して先生は言った。

大きく開けられた窓から吹きこむ秋風に、ラボルト先生のスカートが揺れていた。